慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	言葉の槍：ヤミ族の言語観
Sub Title	
Author	皆川, 隆一(Minagawa, Ryuichi)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1987
Jtitle	三田國文 No.7 (1987. 6) ,p.17- 25
JaLC DOI	10.14991/002.19870600-0017
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19870600-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

言葉の槍
――ヤミ族の言語観――

皆川隆一

はじめに

中華民国台湾省蘭嶼はバシー海峡上に浮かぶ、面積四五・七km^2、周囲三八・四kmの熱帯降雨林におおわれた小さな火山島である。この離れ小島にはヤミ族と呼ばれる二九〇〇人（一九八五年現在）程の人々が住んでいる。ヤミ族は島の比較的傾斜が緩やかな海岸部に、イモウル・イワギヌ・イラノミルク・イララライ・ヤユ・イラタイの六部落を形成しているが、言語や民俗にそれ程の違いはない。島人の多くは、タロイモ・ヤムイモなどの根裁類を主食とし、トビウオなど豊かな海の幸を副食とする半農半漁の自給自足的生活を送っている。かつては、褌や腰巻の伝統的衣装から「ハダカ島」などと通称されたこともあったが、台湾本島と同カリキュラムの教育を受けた若者達を中心に、貨幣経済の浸透、北京語によるコミュニケーションなど急激な変容を見せている。

ヤミ族の母語ヤミ語は、バシー海峡をはさんでフィリピン側に位置するイトバヤット島・バタン島の言語と密接な類縁関係を持ち、オーストロネシア語族西部語派中のバシイック諸語として一括されている。[1]

筆者は特別その言語に習熟しているわけではなく、以下の論述は、占領下時代に日本語教育施設で日本語を学んだ老人達から聞き得た知識を基にしている。そこにおのずと本稿の限界があろうことを断っておく。

一、言葉の槍

イモウルに住むシャプン・マニュワン（台湾名　施利賜）は日本語を巧みに話す老人である。その彼が次の様に述べたことがある。

言葉は槍と同じである。槍が突き刺されば、人は死ぬではないか。それと同じで、悪口（mangavay）を言うと、その悪口は相手の体に突き刺さって、相手を殺してしまう。

悪口を投げつければ、相手も必ず言い返してくるものだ。言い返されれば、自分も胸に槍を受けることになる。だから、けっして悪口を言ってはならない。たとえ本人の居ない所であっても言ってはならない。陰で話していたことであろうと、悪口と

いうのは必ず相手の耳に入るものである。そうすれば、やはり悪口を言い返してくるだろう。

ヤミ族の老人達にとって言葉は単に雲散霧消する音声ではなく、相手を殺傷する槍なのである。劉斌雄はヤミ族の文化の特質として、言葉に霊性が宿るとする言霊信仰を指摘していた。(2) 筆者の調査では大和詞の「ことだま」に相当するヤミ語の所在は不明であったが、シャプン・マニュワンの発言を考えた時、ヤミ族は確かに言語に対する特殊な信念を持っていると言える。

以下、ヤミ族の生活にあって言葉がどういう風に槍としての力を発揮しているのか報告してみる。

二、悪口の威力

どんな文化にあっても、おそらく悪口を言うことは慎まれるべき行為であろう。口にすれば喧嘩になろう。しかし、ヤミ族の言う悪口＝マガヴァイ（mangavay）は、その結末が単に両者の絶縁というだけに止まっていない。お互いの生命すら脅かす行為なのである。それは悪口＝マガヴァイ（mangavay）が槍の中の槍、つまり言葉の中で最も殺傷力を発揮する槍だからである。

ヤミ族が最も忌み嫌う悪口にピトバトバイ（pitobatobay）がある。ヤミ族の誰もが、天の人＝タオ・ド・ト（tawo do to）に深い尊崇の念を抱いている。主要な蛋白源となっている飛魚は、そのタオ・ド・トのがヤミ族に授けた貴重な海の幸である。しかし、いかに尊い魚であろうと、食べている時にピトバトバイという言葉が耳に入ろうものなら、すぐ投棄される。無理に食べれば、やがて体が膨脹して死ぬことになるからだ。

又、他人と言い諍うことがあっても、あるいはどんなに泥酔することがあっても、この言葉だけは口にしてはならないと言う。

ところで、ヤミ族の霊魂観では、霊魂が頭・両肩・両肘・両膝に宿っていると考えられている。人間の生命を左右する一番大事な霊魂は頭に宿っているが、人が死ねとその霊魂は遙か東南海上に想定される白い島（jimalavang a pongso）・赤い島（jibarangbang a pongso）へ赴くことになる。他の一段劣る肩や肘の霊魂は、島内に残り、墓地や山中で生前と同じ様にタロイモを食べ魚を取って暮らすと言う。そうした死後の姿をアニト（anito）と言う。アニトは時として人の目に触れることがあるが、皆一様に赤い痩せこけた体をしているという。こうした死後の存在アニトは、例外もあるが、殆どの場合生者に妬みの気持ちを抱いている。

例えば、自分は子供の時から苦労して育ち、しかも天寿を完うすることなくアニトとなったのに、弟はのんびりと何不自由なく育ち、家を何度も建て、舟を何艘も造り、村人達に一目おかれる人生を過している。少しくらい兄の私を懐しむ気持ちを持ってくれてもいいではないかと妬むのだそうである。生者を見舞う病気や不幸は多くの場合、アニトの妬みに起因する。畢竟、生者はアニトを恐れ、嫌悪し、忌避する気持ちを抱くようになる。同時に、アニトの住んでいる墓地も忌避される。当然のこと墓参といった習慣の芽生えようはずがない。

ヤミ族の墓地は、村からいくらか離れた、海岸線の灌木が生い繁る地にもうけられている。そうした場所にはトバ（toba）という木がよく育っている。忌み嫌われるピトバトバイ（pitobatobay）はこのトバ（toba）を語幹とした語なのである。ピトバトバイという語

は、ヤミ族の人が忌み避ける墓地の光景を具体的なイメージで想起させる語だったのである。墓地(kanitowan)あるいは死(maŕakat——以下〝ŕ〟は歯茎顫動音を表示)の隠喩と言ってもよい。それ故、ヤミ族はこの語を嫌悪するのである。

ピトバトバイと並んで悪口(mangavay)として忌避される言葉にパラムムジ(palamemeji)がある。パラムムジとは石灰や灰のような粉末を意味し、こう言われることは、「おまえも石灰や灰のように粉々になってしまえ」と呪われたことを意味する。

イモウル村のある一族は、自分達の祖先は天界から投げ落とされた石より生まれ出たのだという伝承を伝えている。この石はラリタンと呼ばれているが、黒い光沢のある非常に硬い石である。ラリタンという名の他に、生命ある石(maviyay a vato)とも呼ばれている。人間もまたラリタンの様に固い筋肉質の体が健康で長生きすると言う。これに対し海辺でよく見られる赤味を帯びた脆い石を死の石(maŕakat a vato)という。脆い死の石よりもっとはかない形態が、砕け散った末の粉末なのである。ヤミ族にとっては粉末もまた死の隠喩的表現だったのである。

ヤミ族にとって豚肉はハレの日の最高の御馳走であるが、それはアニトにとっても同じことである。アニトは隙あらばと豚を飼育する囲いの中をねらっている。そのアニトから豚を守る為に、時には槍が立てられたり、喰わずイモの葉に包んだ灰が吊るされる。灰はアニトすら威嚇する力を持っているのである。

右の二例の他に、

mo kavoŕas.　　mo は、二人称。kavoŕas は、木の葉が落ちること。

mo kakmi ni viyasen.　　kakmi は、〜のように。ni は完了。viyasen は、掃く。

mo kakitay.　　kakitay は、刈り取られた草が萎れること。

mo kakmi minapos a oten.　　minapos は、薪などが燃え尽きること。oten は、燠。

なども、普通にはけっして用いられない言葉である。ピトバトバイと共通する表現上の特徴は、これらがみな死の隠喩的表現になっていることである。木の葉が枯れ落ちるように、草が枯れ萎れるように、ゴミが掃き捨てられるように、薪が燃え尽きるように、この世を去ってしまえという意味である。こうした悪口(mangavay)はまだまだ何十とあるが、その大部分が死とかかわる語である。死の隠喩が mangavay として強く拒否されるは、言葉は槍だとする思考にあって当然の帰結と言える。

三、呪文の威力

不吉な嫌な言葉が槍として力を発揮するのならば、当然予祝的な縁起の良い言葉にも槍としての力が備わっているはずだ。そうした例は、トビウオの豊漁を予祝する呪術的儀礼や、船霊込めなどの儀礼に伺える。ここでは、病気や怪我を治す為の呪術的儀礼を例にとってみる。

ヤミ族は大怪我や大病を患った時、回復を願って呪術的治療をと

り行なうことがある。例えば、マヴォアウという毒蛇に咬まれた時がそうである。ヤミ族ならば大抵の者が、マラポナイという青い玻璃珠を親から譲り受けている。ヤミ族にとってマラポナイは、金の首飾りにつぐ大事な宝物である。マヴォアウに襲われた時には、このマラポナイを紐に通し、腫れ上がった傷口付近を軽く縛る。この治療において何故マラポナイが用いられるのか考える必要があるのだが、今の所論じるだけの余裕がない。

マラポナイの意味はさておき、マラポナイを縛りながら唱える呪文もそれに劣らず、治療を成功させる重要な道具立ての一つである。

(a)腫れ上がった傷よ、
私はマラポナイで御前を縛る。
落ち葉が乾き萎え縮むように、
種イモ用に切り残されたヤムイモの一欠片のように、
腫れ上がった傷よ、
萎え縮み、小さくなれ。(3)

こういった意味の呪文が小声で唱えられる。ヤミ語では日常的な会話をチリン（ciring）と言うに対し、右の様な呪術的場面での言葉をトヨトヨヌン（toyotoyonen）と言う。しかし、呪術的場面で唱えられるからといって、全てトヨトヨヌンと言うわけではない。概して手草がとり持たれる呪術的場面であり、なおかつ、健康とか好運を招き寄せる際に唱えられる呪文を指してそう呼んでいるようである。

このトヨトヨヌンの表現上の特徴を知る為に、もう一例掲げてみよう。ヤミ族では、他人を負傷させるようなことがあった時、それが喧嘩であったにしろ偶然の事故であったにしろ、加害者から被害者に親指の爪程の金が一かけら贈られる。金を持たない貧しい者ならば、先程の青い玻璃珠マラポナイで許されることもある。宝物はただ贈与されるだけではない。その宝物で相手の怪我を撫でながら、次の様なトヨトヨヌンが低く唱えられるのである。

(b)傷よ、
私の宝物で御前に触れよう。
私はこの人に怪我をさせてしまった。
水イモ田の水口を堰き止めるように、
血よ止まれ。
体は、ヤリヤリパサラウ(小鳥の名)のように、
軽やかになれ。病は体から失せてしまえ。
私が宝物で治すのだから。(4)

(a)・(b)に共通する表現上の特徴は、両者とも巧みな譬喩が用いられていることにある。(a)では、傷口の癒えることが二通りに譬えられていた。一つは、枯れ落ち葉の萎え縮むように咬み傷の腫れも縮んでほしいという譬喩であり、もう一つは、種イモ用に残されるヤムイモの小片のように、腫れが小さくなれという譬喩である。ヤミ族は冬季にヤムイモ（uvi）を食用とするが、その茎に近い五cm程が種芋用に残される。長いヤムイモのほんの一かけらの様になれと言うのである。

(b)でも二通りの譬喩が用いられている。流れ出る血が、水路を堰き止めたようにぴたっと止まってほしいという譬喩と、小鳥が軽やかに空中を飛び回るように、怪我をして動けぬ体が軽やかになれという譬喩である。

健康・好運を希求する際に唱えられる呪文＝トヨトヨヌンに見られる特徴は、こうした具体的なイメージを喚起する巧みな譬喩が用いられていることにある。

折口信夫は出雲国造神賀詞に見られる「白玉の大御白髪まし、赤玉の御赤らびまし」といった譬喩表現が近代的な単純な譬喩ではなく、白玉や赤玉の持つ他を感染させる力によって対象物をかぶれさせようとした言語の上のまじないであると述べていた。(5) 神賀詞の場合は、譬喩部分の白玉や赤玉が発唱者の瞩目、ないしは直接手に取り持たれているはずだ。それに対し、トヨトヨヌンの譬喩部分は瞩目でも手草でもない。しかし、いずれも言語の上のまじないであり、譬喩部分に感染力の源があるという点では同じであろう。神賀詞同様トヨトヨヌンの譬喩も単なるレトリックではない。ヤリヤリパサラウや枯れ葉の具体的なイメージが、槍の飛び進むべき的を明瞭に照らし出しているのである。

悪口（mangavay）と呪文（toyotoyonen）とに共通する表現上の一特徴は、巧みな譬喩表現という点にある。言葉の槍は悪口と呪文に関する限り、譬喩表現をその照準器とすることでよりその威力を発揮しているのだと言える。

四、歌の威力

(1)客の歌

ヤミ族は男も女もともに歌が好きである。歌もまた当然のこと槍としての威力を発揮する。その威力が最も自覚されるのは、ミヴァライという祝事の際に開かれる歌会においてである。

ヤミ族の男達はトビウオ漁の終了する陽暦の七月頃から、ある者は家を建て替え、ある者は船を造り替える。家や船を造ることは、人々から賞讃を受ける絶好の機会なのである。しかし、どんなものでも造れば賞讃されるというわけではない。核家族形態をとるヤミ族の社会では、結婚によって親から独立すると、まず入口一つの小屋に住む。やがて、二つ三つ四つと大きな家を建て替えていく。人々の賞讃と羨望の的になるのは、家ならば、入口が三つ以上の家で、内部にトモックという三味線の撥状の板柱を取りつけた時からである。船ならば、大小は関係ないが、船体にヤミ族独特の紋様を彫刻した場合である。

そうした家や船が完成すると、島中から友人や親籍を招いて大盤振舞が繰り広げられる。ミヴァライである。ミヴァライは、今なお自給自足生活を旨とするヤミ族にとっては大変な散財である。まず、貴重な財産である山羊や豚が何匹も供応の為に殺される。又、タロイモは招待客の他、村人全員に一ザル見当分配される。主催者は散財と引き換えに賞讃と自己の満足を得るのである。(6)

大盤振舞は早朝繰り広げられるのだが、それに先立って歌会が主催者宅で夜を徹して行なわれる。夕方から蜿々明け方まで、主催者と客の間で歌の贈答が繰り返される。ここで贈答される歌には、ヤミ族の言葉は槍だとする言語観と同時に、ヤミ族特有の運命観も伺える。

一九八五年三月四日、イララライ村、シャプン・パビヌン家の改

築時の歌会を例に説明する。招待客の唱った歌である。

(第一段)Oyaka maomaoy do wawaito a,
あなたは 力を出せない で～ 希
maomaoy ka pa do kacyan.
あなたは また 陸
Oyamo kararakeh apowan a,
あなたは 年寄り
toda derderder do alaman a,
(?) フラフラしている～の時 歩く
orio rawarawayan da jimo.
だから 嘲笑している 人々が あなたを

(第二段)Ovid nyo o maslot so kalalin a,
釣り糸 あなた方の 撚る 三本の糸を
pinipalapalagan no arilos a,
沢山かかってくる 大魚が(ブタの譬喩)
kano micyawoksoen no arayo a iyawo,
又 海面から跳びはねる シイラが(山羊の譬喩) 最大級
do among a pinaranawa,
～へ 魚(タロイモの譬喩) 数多くの
ivaon mo do masalan so sahad
土産を持たす ～で (?)きれいな入れ物 中

(第三段)Sicyarerasi no ovan o miwalam,
(?) 白髪 のんびり休んでいる
nira ovay a, to piyangangaya.
あなたの子供達も 同じ様になる

大意は次の様になる。

(第一段)あなたは海へ出ても大して仕事が出来ないでしょ。田畑でも同じ事。あなたは年寄りなんだから。歩く時さえフラフラしているじゃないですか。そんなだから、村の人があなたのことを嘲笑していますよ。

(第二段)三本の糸を撚って作ったあなたの釣り糸には、大きな魚(豚)が沢山かかってくる。又、大きなシイラ(山羊)までもが、海面を飛び跳ねて、すでに船に釣り上げてある魚(タロイモ)の中に、飛び込んで来る。
(豚も山羊も大きいのが沢山用意してありますね。それに、タロイモもね。)
それをきれいな器に入れて土産に持たせてくれるのですね。

(第三段)仕事にも行かず家でブラブラ遊んでいてもよい年になるまで、頭の毛が真白になるまで長生きして下さい。あなたの子供達も、あなた同様長生きするように。

一語一語の意義は不正確であるとの謗りを免れ得ないが、歌の大意は右の解釈でそう外れていないはずである。これはイモウル村から招待されたシャプン・シルグンが主催者のシャプン・パビヌンに贈った歌である。第二段では、招待客をもてなす為に準備された豚・山羊・タロイモの豊富であることを賞で、第三段では、主催者シャプン・パビヌンの寿命長からんことを唱い、合せてその息子達の長寿をも予祝している。こうした内容が宴席に相応しい祝い歌となるであろうことは我々日本人にも実によく理解できる。

しかし、第一段はどうであろうか。主催者のシャプン・パビヌン

が歩行時さえ頼りなくフラフラしていると嘲笑した歌となっている。祝いの席に招かれた者が唱うべき内容とは思えない歌である。この時私を伴なってくれたシャプン・マニュワンは、私の疑問にこう答えてくれた。

ミヴァライに招かれた客は、主催者をただ賞め讃えるだけでは駄目だ。勿論馬鹿にするだけの歌も駄目だ。二割くらい貶して、八割くらい賞め讃える歌でなければならない。言葉は槍と同じだから、貶し過ぎれば相手の運勢(alelag)を引き下げてしまう。そんな歌を唱えば主催者とすぐ喧嘩になるだろう。そうかと言って、ただ賞めるだけの歌も主催者を怒らせることになる。賞め過ぎの歌を掛けられると、主催者は自分の身が危ないと思うからだ。

貶し過ぎれば、ヤミ族ならずとも祝いの席で何たる無躾な奴だと顰蹙を買うのは当然であろう。ましてや言葉は槍だとする民族である。歌の作法として、相手の運勢を引き下げることがないように心配りしなければならないというのはよく理解できる。

だが、賞め過ぎた歌になってもいけないというのは何故であろうか。ここには、ヤミ族の実に興味深い運命観が伺える。賞められれば賞められる程、賞められたその方面では運勢はますます良くなる。しかし、飽くまでその方面だけである。逆に、それ以外の方面の運勢は悪くなってしまうと考えるのだ。一方面の運勢が抜きん出ると、他の運勢が衰えるというのは、例えば次の様なことである。シャプン・マニュワン自身の懐古談である。

私は結婚する前多くの女に愛された。女達が始終私の所へ遊びに来ていた。又、私は働き者だったのでイモ水田も沢山開墾した。ヤミ族の者がまだ誰も台北に行ったことがない時、最初に台北へ行ったのも私だった。友人に連れられて東京へヤミの歌を唱いに行ったのも私だけだった。ヤミ族を研究する外国人は日本人でも台湾人でもアメリカ人でもみんな私の所へ話を聞きに来る。これは私の運勢が高いからである。

しかし、その分、逆に駄目になった所もある。私の子供は五人も死んでいる。女に好かれ、イモ田も多く持ち、外国人にも信望を得た。しかし、子宝にだけは恵まれなくなってしまった。

何人もの子供に恵まれ、数多くのミヴァライを経験することがヤミ族の幸福の典型である。イモ田を何枚も持つシャプン・マニュワンは経済的にもまあまあの成功者である。万葉びと風の色好みの実践者でもあったし、外国人の尊敬も勝ち得た老人であった。しかし、それ故子供運が低くなったと自身の人生を振り返えるのである。

又、あらゆる方面で順風満帆な人生を送ったとしても、それは自分一代のことである。自分の運勢が強ければ強い程、逆に自分の子供の運勢は弱くなってしまう。いかに自分一代の人生が華やかなものになろうと、子の代・孫の代で滅んでしまっては何にもならない。これがヤミ族の人生哲学である。

賞め過ぎの歌に身の危険を感じるとは以上の意味である。それがまた祝い歌には一見不適切と思われる内容を詠い込む理由でもある。

(2) 主催者の歌

客が主催者の力量優れたことを唱い掛けてくれば、主催者も同様

にその客人の優れていることを歌い返す。歌会では客人と主人がお互いに相手に掛かって行く歌を唱うのが原則である。しかし、例外もある。主人の歌である。徹夜の歌会の中で一曲くらい主人は自分自身に掛かる歌を唱うことがある。

ミヴァライの歌会でシャプン・パビヌンは次の様な歌を唱っていた。

(前半)Angayvay sira o mina-paisinsinmo
　　仰臥　彼ら(祖先は)　～した 交換して集める
　so alonagen a,
　～を　宝物
　kano inalomirem do alboran o kavogaw.
　又　湧水のあるイモ田　～に　湧く　水

(後半)Inapo sira o icyapangongoyod a,
　　祖先　彼ら　嘲笑される
　apereh so kacinokad no oraen a,
　　少ない　イモ田　タロイモ
　miyan rana do panapanawaji na
　　有る　すでに　後ろの方
　vaniyaga no makaikailiyan.
　　何の役にも立たない駄目な人　村人の中で

大意は次の様になる。

(前半部)飢饉の時、私の祖先は宝物や湧水田をたくさん手に入れた。(何故なら、人々が宝物や湧水田を食物と交換してもらいに、私の祖先の所へ来たからだ。私の祖先の田だけは飢饉に縁が無かった。)

(後半部)私の祖先はタロイモ田を少ししか持っていなくて馬鹿にされていた。村中で一番駄目な者として最下層に位置する者であった。

前半部で祖先を高め、後半部で反対に引き下げた右の歌は、毀誉双方を詠い込むべきとするヤミ族の歌の作法には適っている。しかし、問題はこの歌が相手の毀誉を唱ったのでなく、自身の毀誉を唱っていることにある。

ヤミ族社会は頭目といった伝統的権威が存在しない所に一大特徴があるが、それだけになおのこと、個々人の間の威信競争には熾烈なものがある。いかに勤勉であるか。いかに多くのイモ水田を開墾したか。いかに多くの宝物を所持しているか。その結果として何度ミヴァライを開催することができたかといった競争である。

本来自慢話は他人を貶めることが目的ではないはずだ。しかし、威信競争華やかなヤミ族の社会にあっては、自慢話が聞き手の競争心を煽ること甚しい。不快を通り越して、怒りを引き起こしてくる。自慢話は話し手の意思にかかわらず、結果として相手を貶めたと同じ意味を持つ。自慢話は慎しまなければならないのである。しかし、唯一許される場合がある。ミヴァライの歌会である。シャプン・パビヌンの歌はそれであった。彼の母方の祖父は実際の所かなりの財産家であったらしい。前半の歌はそうした事情を踏まえたものであろう。しかし、それがたとえ公の認める事実であったとしても、ミヴァライ以外の場で自分の一族の繁栄ぶりを自身で高めた歌を唱うことは許されない。一曲くらいは許されるミヴァライの歌会であっても、シャプン・パビヌンは極めて用心深く唱っている。後

半では前半で唱った内容と全く正反対のことが唱われていることだ。たとえミヴァライの主催者の歌だとしても、人々の中には嫉妬にかられて陰口の槍を突き刺す者が出てくるかも知れない。言葉を槍とする思考では、その程度の心配りは当然のことだったのだと考える。

五、結語

ヤミ族の老人は言葉を槍や刀に譬えて説明してくれた。言葉は槍や刀に劣らぬ武器だと言うのである。それはヤミ語で mangavay（悪口）と呼ばれる言語表現が極端に忌避されている事にも伺えた。又、病気治癒を願う呪文を初めとして、数多くのヤミ族が伝承する呪文の存在もそのことを裏付ける。この悪口や呪文には一つの特徴がある。譬喩表現が多用されていることである。その譬喩表現は、言葉の槍が狙いを誤またずに的を突き刺す有効な照準器の役割を担っているのであろうことを述べた。そして、ミヴァライの歌会の歌の作法にも言葉は槍だとする言語観が如実に表れていることを指摘し、同時に彼らの独特な運命観が伺えることを述べておいた。

なお、文中のミヴァライの歌の表記は、台北にある中央研究院民族学研究所のヤミ族嘱託シャプン・マガヴァツ氏の御尽力によっている。しかし、筆者自身の考えで最き改めた部分もある。誤りがあれば筆者の責任である。

注 1　山田幸宏「バシイック諸語――イトバヤット語を中心として――」『季刊どるめん』第四号、森口恒一「ヤミ語」『黒潮の民族・文化・言語』所収。

2　劉斌雄「ヤミ族の子どもの生活と遊び」『子ども文化の原像』所収

3　原語では以下のようになる。
Yako imo pakedkedan so mafuponay a, akma-kay mina-ayo a vohovohong a, kakma-moy ni kombet a atatayo no ovi.

4　原語では以下のようになる。
Yako imo pabebesan so tamtamek namen a, ko ni pirafa icytataw ko a, akma-kay ni matdes ao pasiswafan a fafa na, kakma-nay yaliyalipasalaw no katataw na ji miingenen, ta yako imo wanwanan no tamtamek namen a.

5　折口信夫全集第一巻『古代研究（国文学篇）』91頁

6　拙稿「ミヴァライ」『季刊民族学』第36号